



TITLE:

あとがき

AUTHOR(S):

---

CITATION:

あとがき. 静脩 1968, 5(4): 6-6

ISSUE DATE:

1968-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36493>

RIGHT:



### 基礎物理学研究所図書室

大学構内の北のはずれにある、小じんまりした白い建物が、基礎物理学研究所である。前身は、現所長の、ノーベル賞受賞を記念して設立された湯川記念館で、その後、わが国最初の共同利用研究所として出発した。

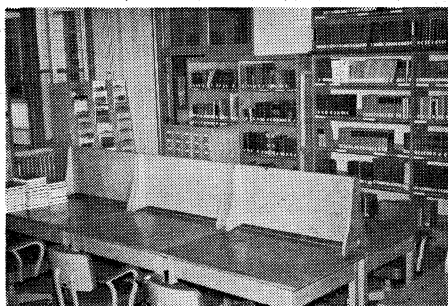
図書室はその2階にあり、事務室、閲覧室及び書庫からなっていて、職員は3名である。閲覧室の窓からは、植物園の緑と、四季おりおりの大文字山がながめられ、恵まれた自然環境である。現在の蔵書数は約13,000冊で、共同利用研究所の性質上、利用者が学内だけにとどまらず、全国の基礎物理学研究者に開放されている。

この図書室の特徴の一つとして、幅広い収集方針があげられるだろう。蔵書構成は科学史関係から生物物理などの境界領域の分野にまでわたっている。それは、研究目的が物理学の中でも、理論分野であるため、何よりもまず、図書、専門雑誌の整備に主力がそそがれるためであり、またそれを裏

づける予算にも恵まれているからである。

購入及び交換、寄贈により受入れられる雑誌の数も、200種類以上になる。これもまた、理論物理の分野から応用分野にと広範囲にわたるので、他学部からの利用者も相当の数になっている。特に利用度のたかい図書及び雑誌は、2部ないし、3部の複本をそろえる方針で、研究活動に支障のないよう考慮されている。

ところで、多少歴史をもつ図書室の例にもれず、ここでもスペースの問題に頭を悩ましている。現在書庫は3ヶ所に分かれており、いずれも、収容力の限界に達している。資料の分散は利用上非常に不便なことである。利用者も、掛員も、時間と労力をむだにしていることになる。現在、この問題を解決するのが一つの課題であり、応急処置ではなく長期的展望のもとに改善の必要を感じさせられている。



あとがき 校庭のいちようも黄色くなり燈火に親しむころとなりました。

今夏から壁の塗り替えにつづいて、床張りとも図書館の内装もようやく完成し、明るいふんい気になりました。今冬からはスチームが設置されて暖かい、快適な閲覧室が皆様を待っています。外観が美しくなるとともに、図書館の内容も皆様のご意見を聞かせていただき、ともに歩みよつてどのようにすれば一番利用されやすく、お役にたてるかと考えています。「一言・ふたこと」欄に利用者に対して図書館からのアプローチが足りないのご指摘がありましたが、編集子もこの欄に対するサービス側の声を載せることができればと、また、図書館のPRに役立つように「図書館だより」を利用していきたいと思っています。

コンクリートの大きな岩石のように見える図書館でも“たたけよ、さらば開かれん。求めよ、さらば与えられん。”一度門をたたいて下さい、そうすれば無限の宝庫のとびらは開かれて富は皆あなたのものです。ちょっとおおげさですがそうありたいと思っています。これから最後の学期に近づきますが卒業論文作成などにお忙しい事と思います、せいぜいご利用下さい。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 5, No.4 (通巻25号)1968年11月15日発行・編集発行人：  
岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771-8111(内線)2220-2238